

山村集落を維持させる世代間伝承に関する研究 ～どぶろく祭りから見る地域伝承の実態～

Research on Handing down Tradition to the Next Generation to Sustain the Village : Doburoku Matsuri Festival in Shirakawa Hachiman Shrine

浅田麻記子*・落合知帆**・小林正美***
Makiko Asada*・Chiho Ochiai **・Masami Kobayashi***

In Japan, there are many suburban villages where even continuing the village life is difficult. However, Shirakawa village sustains their life and community. The reason is that there is a mood to brings up next generation could be seen in the whole village. The study focused on Doburoku Matsuri (Festival) in Shirakawa village, by conducting an interview survey to the local residents and participatory observation. The traditional skill and awareness are handed down by hierarchical and horizontal relationship, and it was understood that these relationships establishes a multiple structure. Also, though these community activities, all the residents have their own roles and that helps for them to be aware of a member of Shirakawa village.

Keywords: Community Festival, Handing Down Tradition to the Next Generation, Local Coping Capacity
祭り, 世代間伝承, 地域力

1. 研究の背景と目的

岐阜県白川村は合掌家屋が数多く残り、世界遺産に登録されている山村集落である。これまでの報告により、白川村の人々の生活の中に古くから伝わる地域での活動¹⁾(火の番回りや消防団など)が日常的に多く残っていることを明らかにしてきた。これらの活動は地域自治の基盤となっているが、地域の活動はそれだけでなく、古くから行われている神社での祭礼も存在する。神社での祭礼は地域社会そのものと密着不離な関係をもって存在するとされており²⁾、また、行事は地域運営のために必要な機能を担うと同時に住民同士がつながる場としての役割を持つ³⁾ため、集落を維持していく上で欠かすことが出来ないものである。現在、多くの山村集落では高齢化や少子化の影響を受けて、集落の存続すら危ぶまれているところが少なくない中で、白川村が集落として維持されているのは、このような古くからの地域活動や祭りを通して、世代間伝承が行われており、このことが次世代を担う若者や子どもを村全体で育てる環境を作っているのではないかと考える。そこで本研究では、白川村荻町を中心に行われるどぶろく祭りに着目する。どぶろく祭りは、数多くある地域活動の中でほぼ全ての村人(子どもからお年寄りまで)が参加する唯一の行事であり、中でも行列を作って村の中を歩く「村まわり」では村人それぞれが役割を担っている。その村まわりの行列の中で、今回は中心的な役割である獅子役者と子どもが行う闘鶏楽における技術伝承の方法や意識形成、また、それに関わる村人の意識形成について明らかにし、これらの次世代育成の仕組みと集落維持との関係について考察する。

2. 調査方法

本研究の調査期間は2009年10月9日～22日と11月6日～20日の2回にわたり、10月の調査では獅子舞の練習やどぶろく祭りの準備や当日に参与観察を行った。また、2回の調査を通して、

氏子総代会(2)、杜氏(3)、かぎ取り伍長(2)、かぎ取り組(2)、女性会(5)、獅子役者(15)、獅子役者OB(6)、村民(10)など、白川八幡神社のどぶろく祭り関係者約40人を対象に聞き取り調査を行った。聞き取り調査の主な内容は以下に示す。

- (1)各役割の活動内容、技術、意識
- (2)次世代への技術や意識の伝承
- (3)村民の祭りに対する意識

3. 白川八幡神社のどぶろく祭り⁵⁾

白川村では秋になると5つの神社で豊作の秋の喜び、家内安全と山里の平和の祈りを込めて、天下の奇祭と言われる「どぶろく祭り」が盛大に繰り広げられる。その中の1つである白川村荻町にある白川八幡神社では、毎年10月14、15日の2日間に本神社の本祭り(例大祭)としてどぶろく祭りが行われている。他の神社では行事が簡略化されている中で白川八幡神社では、毎月行われる月次祭をはじめとして多くの行事が現在でも氏子(村人)によって行われている。祭り前日も朝7時から氏子総出で準備が行われ、荻町全体が祭りの雰囲気となる。祭り1日目は早朝3時半からの「起こし太鼓」で始まる。これは祭りの開始を告げるもので、獅子役者を中心とする村の有志が笛と太鼓を演奏しながら荻町をはじめとする

3つの集落を回る。その後、それぞれが袴や羽織袴などの正装をして神社に集まり、本殿でのお供えや玉串奉奠などの神事(試学祭)の後、行列となって集落内を



写真-1 村まわりの様子

*非会員・京都大学地球環境学舎修士課程 (Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University)

**正会員・京都大学地球環境学舎博士課程 (Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University)

***正会員・京都大学地球環境学舎教授 (Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University)

表一 獅子役者の概要

回る。この村まわりの行列は鬼に扮した村人や正装した村人、闘鶏学や稚児の子どもたちなど村人総出で構成され、その長さは約 200m にもなる。この行列の中心的な役割を担うのが獅子役者である。村まわりでは、数軒の氏子の家を回り、獅子舞を先頭に神輿などが庭先に入り、宮司の司祭による神事が行われる。神事の間、獅子舞が 2, 3 曲奉納され、闘鶏楽が演奏される。村まわりの後、神社に戻り、境内でも同じく闘鶏楽や獅子舞の奉納が行われる。獅子舞の奉納は昼間に一部だけ行われ、夜 19 時から夜の部では全演目が奉納される。昼間は観光客が多い境内も夜になると、村人中心となるため、獅子役者にとっては夜の奉納でより力が入ったものとなる。ここでの祭りは村人にとって年に 1 度の楽しみであり、村人のための行事である。これらの奉納に続き、郷土芸能の奉納など祭りは夜遅くまで行われ、2 日目もほぼ同じ内容で繰り返される。

4. どぶろく祭りにおける獅子役者

4.1 獅子舞の概要

白川八幡神社の獅子舞は長い歴史を持つとされ、伝承では寛永 12 年に山下大和守氏勝が娘の病氣治癒のお礼に八幡神社の再建と「姫獅子」の奉納を行い、それから 200 年後の天保年間にも人間の象徴である獅子捕りを有する「雄獅子」を奉納したと伝えられる。この獅子舞は笛と太鼓が演奏する囃子に合わせて、8 本足で獅子が舞うことで、悪疫を払うとされている。演目は「姫獅子」が 7 曲、「雄獅子」が 10 曲の合計 17 曲で構成されており、全てを通して奉納すると、1 時間半もの時間がかかる。また、平成 7 年には岐阜県指定重要文化財にも指定されており、文化的価値が認められている。

4.2 獅子役者の構成

獅子舞を演じる者たちは獅子役者と呼ばれ、笛方・太鼓方・獅子回し・獅子捕りから構成されている。獅子捕りは少年によって演じられ、それ以外の役は 20~40 代で構成されている。それぞれの役割は各世代からの 1 名または 2 名が集まって構成されており、40 代の引退と共に 20 代が入り、次世代にその伝統技術が伝承されていく仕組みになっており、獅子役者の構成も次世代育成の観点で考慮されている。

4.3 獅子役者の技術伝承

祭り当日に向けての練習は例年 9 月 20 日から荻町多目的集会施設で行われる。しかし、役者が数年変わっていない、または、今年初めての役者がいるなどの状況を考慮して練習開始日は決められる。練習は毎晩 19 時半から 22 時まで行われ、最初は 1 演目ずつ、10 月に入ると通し練習となる。獅子舞に関する楽譜や指導書は存在しないため、この短い練習期間にそれぞれがその技術を目や耳を使って体で覚えていく。それぞれの役割の役割、技術、意識、伝承方法について表一に示す。

(1) 笛方

笛方の吹く笛は木製の横笛であり、指穴は 6 個である。技術としては、安定した高い音を出すためのくちびるの形や息づかい、音階を覚えること、またそれに対応した指の押さえ方などがある。これらの技術は先輩から「見て覚えろ」とだけ言われ、各自で先

	笛方	太鼓方	獅子回し	獅子捕り
仕事内容	笛の演奏 (メロディー)	太鼓の演奏 (リズム)	獅子舞を舞う	獅子と共に舞う
構成	7 名 20 代~40 代 (約 5 年間隔)	2 名 20 代と 30 代または 30 代と 40 代	4 名 20 代~40 代(各世代に 1 名または 2 名)	2 名 小 3~中 2(小 3 と小 6~小 5 と中 2)
役割	「キリ」 「吹き出し」	大太鼓 小太鼓	獅子頭 ユタン	2 名で演目異なる
技術	口の形 細く、強い息 使い 指の押さえ方	リズム タイミング 音の出し方	頭と口の動かし方 ユタンの扱い方 ユミの動かし方 尾と足の動かし方 獅子捕りとの距離	振付 セリフ 獅子との距離
体力	肺活量	筋力	持久力	持久力 元氣よく
伝承	高い音を出す 指の押さえ方 を見て覚える 吹き真似 全曲習得(2, 3 年) 「吹き出し」(2 番手) 「キリ」(1 番手)	リズムを見聞きで覚える 手の使い方を質問して覚える 小太鼓から始める 大太鼓に交代(先輩の引退の約 3 年前)	師匠(OB)や先輩が手取り足取り教える 一体となって生きているように 細かい足の動き 全曲習得(約 15 年) 自分の体こいかに なじませるか	師匠(OB)や先輩が手取り足取り教える 下の役割のうち に上の役割は 見て覚える
意識	獅子の基本 先代からの教えを次世代へ	先代からの教えを次世代へ 大太鼓を叩く 期間を考慮	師匠や先輩の指導をもとに自分の獅子を作り上げる	唯一の子ども獅子役者

輩の指使いを後ろで観察したり、先輩に直接聞いたりしながら、家での自主練習で音を出して習得していく。全体練習の場で吹くようになると、演奏中に細かく注意されたりしながら、先輩から若手への指導が行われることもある。全 17 演目が吹けるようになるには 2, 3 年かかり、1 人前になるには 5 年はかかるそうだ。このような技術を習得し、実力が笛方の一番手になると「キリ」と呼ばれる曲の締めくくりを 1 人で吹く役目が、2 番手になると「吹き出し」と呼ばれる最初の 1 小節を吹き始める役目がそれぞれ与えられる。このように笛方の中で経験年数や技術の向上に伴い、役割は変化していく。



写真一 笛方の練習風景

(2) 太鼓方

太鼓方の叩く太鼓は平太鼓の大太鼓と附縮太鼓の小太鼓の 2 種類があり、大太鼓は先端に布を巻いた 2 本のバチで、小太鼓は撓りのある木で出来た 2 本のバチで叩く。演目によって小太鼓と大太鼓の組み合わせが 2 人とも大太鼓のものがあるが、獅子役者になった頃は小太鼓を使う際には小太鼓の担当をする。技術としては、叩くタイミングや音のキレなどがあり、先輩が叩くのを後ろで見たり、向かい合って叩きながら習得していく。どの音をどちらの手で叩くかなどの細かい動きは若手が先輩に質問することで伝承されている。先輩役者は引退する数年前から、若手に自分の持っている技術を全て教えるために大太鼓の担当を譲り、最後は後輩への技術伝承に使われる。

(3)獅子回し

獅子は頭と「ユタン」と呼ばれる布製の胴体、胴体を内側から支える2本のユミで出来ており、4人で1つつつ担当し、演目ごとに交代して



写真-3 獅子回しの練習風景

いく。練習の最初は頭とユミだけを持ち、頭担当は頭の動かし方、ユタン担当は頭にユタンがかからないようなユタンの動かし方、ユミ担当はユミの前後左右の動かし方、また、4人とも足の動かし方を練習していく。10月になると、ユタンに入り、全体としての動きを練習していく。全体として、獅子が生きているように見せるため、息を合わせ、お互いの動きが連携していることが重要である。笛や太鼓の見聞きでの習得方法とは異なり、OBである師匠や先輩役者が手取り足取り直接指導していく。1年目に頭を担当出来る演目は限られ、役者歴を重ねていくことでその演目が増えていき、全演目の頭を回せるようになるのは15年ほどの月日がかかるそうだ。また、獅子回しはただ覚えてだけでなく、それぞれの人からのアドバイスをもとにタイミングや回し方を自分のものにして回せることが1人前であるとされており、役者人生をかけて自分の獅子を作り上げていく。

(4)獅子捕り

獅子捕りの少年2人は小学3年生で獅子役者入りし、中学2年生で引退となる。演目により異なる、木の棒と和紙で出来た「ラカン」「ザイ」と呼ばれるものや刀、長刀の小道具を持ち、雄獅子と共に舞う。2人の少年は年少者と年長者毎に役割が異なり、年長者の方が動きの激しい振りが多い。小学3年生からの3年間は年長者の役、小学6年生からの3年間は年長者の役となる。獅子と同様に師匠や先輩が手取り足取り教える。練習では、指導者が獅子捕りの隣に並んで一緒に踊りながら、「右」「左」「飛べ」「回れ」と指示が出され、振りのタイミングなどを覚えていく。指導者は常に「声は大きく」「飛ぶ時は高く」「動きはきびきび」と指導する。獅子捕りは他の獅子役者と異なり、演目も雄獅子のみであるが、激しい動きに加え、声もセリフもあるため、当日は少年らしく大きな声で元気に演じることが求められる。

4.4 獅子役者の意識形成

獅子役者たちは伝統的な獅子舞を守っていくために、先輩から教わったものをそのまま習得し、次世代に伝承するという意識の元、口伝により技術の伝承を行っている。しかし、口伝である以上、多少の変化が生じているところもあるが、その時代の獅子役者が作り上げた獅子舞が尊重し、伝統を重要としながらも変化を受け入れるという意識が獅子舞が現在も存続させている。

また、獅子役者は村に戻ってきたタイミングや年齢などが考慮された選ばれし15人である。村人の多くが、幼い頃から祭りに参加し、獅子捕りや獅子役者になりたいと憧れを持っている。若者が村に戻ってくる理由の1つに「獅子役者になりたいから」があげられるほどであった。そのため、自分に声がかかった時には

非常にうれしく、名誉であると感じる一方で、同時に大きな役割であることに不安を感じるそうだ。夜の奉納での観客はほとんどが顔見知りの村人であり、獅子役者にとっても最も力の入る時間である。みんなの憧れの存在である獅子役者をやらせてもらっている以上最高のパフォーマンスを披露したいという獅子役者全員の思いがある。そのため、獅子役者は出来ることならいつまでも獅子役者で居たいと思うのが本音であるが、最高のパフォーマンスが出来なくなると村人にも申し訳ないと考えており、次世代育成を考えた上でも自分が引退することは必要であるので、自分の持っている技術を全て若手に受け継いで引退する。

20代で獅子役者入りをし、40代で引退するまでに獅子役者としての意識も変化していく。獅子役者になった頃は選抜されたうれしさと覚えることに必死だが、歳を経るにつれ、特別な役割が与えられたり、若手の指導を始めると、次第に全体的なことが見えてきて、獅子役者であることの責任の大きさを実感していく。聞き取り調査でも、引退が近くなればなるほど、責任やプレッシャーを感じているとの声が聞かれた。

このように獅子役者は実際に活動していく中で技術を習得・伝承し、それに伴い、獅子役者としての意識が形成されていく。

4.5 獅子役者に対する村人の意識

獅子役者は祭りの花形であり、集落の人々にとっても特別な存在である。獅子役者には神社に神様の居ない神無月の祭りで悪を払っていくという役割もある。「獅子役者がいないと祭りは始まらない」と言われ、村人も特別な存在として捉えている。獅子役者だけには祭り当日の朝に「とよみの酒」と呼ばれる朝食やお酒が振る舞われ、その終わりを他の村人は待ち、獅子役者の到着次第神事が始まる。

子どもたちにとっても獅子役者は憧れの的であり、獅子舞好きの子どもたちが多く見られた。毎晩獅子舞の練習に連れてきてもらっている子ども、獅子舞を見ながら体を揺らす子ども、獅子捕りの真似をして踊りだす子ども、子ども用の獅子を常に持ち歩いている子どもなど様々な子どもたちの姿が見られた。

子どもの頃から獅子捕りの動きはもちろんのこと、獅子も全部回せるし、太鼓も全て叩けるといった若者が居たり、太鼓と笛の音が聞こえると飛び起きていたという人もおり、子どもの頃から祭りや獅子役者への特別な思いを持っている。

このように子どもたちにとっても憧れの存在であることや村人から特別な存在とされることが獅子役者の名誉であると同時に、プレッシャーを与え獅子役者の自覚や責任といった意識の形成に影響を与えている



写真-4 獅子舞を見つめる子どもたち

5. どぶろく祭りにおける子どもたち (鬨鶏楽)

5.1 鬨鶏楽の概要

白川村荻町の鬨鶏楽は40年ほど前に同じ飛騨地域の集落から取り入れられたものである。小学校3年生～中学校2年生までの男子全員(約30人)で構成されて



写真-5 鬨鶏楽の奉納

おり、白地に色鮮やかな鳳凰の意匠が施された衣装と編笠を身につけている。その中で、年上から順に6人が太鼓、他のメンバーは鐘を担当し、神社の舞を演奏する。

5.2 鬨鶏楽の技術伝承

鬨鶏楽の演奏は太鼓と鐘の音だけで構成されている。まず、これから叩く鐘の音を歌にしたものを習い、次にこの歌を歌いながら手拍子で鐘を叩くタイミングを覚えていく。これでタイミングを覚えると、古くなった昔の鐘を使って実際に叩く練習をする。鬨鶏楽の難しいところは大勢の人数で音を合わせることである。音が途切れたところの最初の1音だけを太鼓が先行して叩き、その後鐘が入っていく。みんなで合わせるための合図はこの太鼓の音のみであり、繰り返し練習して息を合わせていくしかない。

鬨鶏楽の指導に当たるのは、太鼓を担当している年長者の中学2年生で、小学3年生の新入りが数人グループを組むと、そこに1人ずつ指導者としてつく。自分が演奏出来るようになるだけでなく、中学2年生になった時には指導することも頭に入れておかなければならない。獅子舞などと同様に鬨鶏楽も楽譜などがあるわけではなく、それぞれの感覚で行なわれている。みんなの音を合わせようとするあまり、10年前と比べると速度が遅くなっているそうだ。

5.3 鬨鶏楽における意識形成

鬨鶏楽は小学3年生になると、男子はほぼ全員が参加するため、自分の意思でやるやらないが決まるものではない。しかし、それまではただ見ただけだった祭りから、自分が参加する祭りへと変わっていく。「どんな役割でも行列の中に居られることがうれしい」というように、行列の一員として参加することで、子どもの頃から祭りを作り上げていく一員であるという意識形成がなされている。

6. どぶろく祭りを通して見られた世代間伝承

ここで取り上げた獅子役者と鬨鶏楽以外にも村人には様々な役割が存在する。その活動内容や伝承方法などについて表-2にまとめた。

このような様々な役割を担いながら、技術・意識の伝承は組織内での上下関係やそれを取り巻く周りの人々によって、口伝や指導、自然習得といった形で行われていることがわかった。図-1にはその仕組みを示す。白川村においては、村人による各組織によって様々な活動が行われており、その組織の活動は組織外の村人によって見守られることで支えられている。その期待に応える

表-2 どぶろく祭りにおける世代間伝承

組織	活動	伝承方法	対象
氏子(村人)	準備や片付け、村回り、どぶろく作り	自然習得、書伝、口伝	年配者から若手引き継ぎ
獅子役者(笛、太鼓)	笛、太鼓の演奏	口伝	先輩から後輩
獅子役者(獅子回り、獅子捕り)	獅子、獅子捕りの演技	指導	師匠、先輩から後輩
鬨鶏楽	鬨鶏楽の演奏	口伝、指導	先輩から後輩

ために、組織内では先輩から後輩への技術や意識の伝承が行われ、同年代同士では活動や時間を共有することで高めあいが行われる。世代間伝承は縦のつながりだけでなく、横のつながりもあり、地域全体として重層構造の人間関係を構築し、その中で組織・村人の一員としての意識が形成されていく。

また、獅子舞のような子どもの頃から記憶に残っている集落の伝統文化が集落の魅力となり、若者が村に戻ってくるきっかけにもなっていることもわかった。獅子役者だけでなく、子どもたち全員には鬨鶏楽や稚児といったように、どぶろく祭りにおいて子どもからお年寄りまでにそれぞれの役割があり、集落の一員として役割を果たさなければならない。このような活動を通して、次世代の若者や子どもに対して白川村の一員である自覚を芽生えさせ、村全体で育てていこうという環境を作っていることが白川村のような厳しい自然環境の中で集落を維持させていることがわかった。

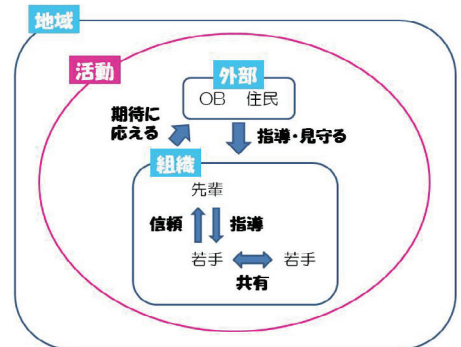


図-1 世代間伝承の仕組み

謝辞

本調査において、白川村役場、白川村教育委員会、どぶろく祭り関係者の方々にご協力いただきました。また、本研究は平成21年度文部科学省科学研究費補助金(基礎研究(B)19310106)「重要な建造物群保存地区の水利と市民防災力を考慮した地震火災対策に関する研究」(研究代表者大窪建之)の助成を受けた。ここに記して、深く感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 浅田麻記子, 落合知帆, 小林正美「岐阜県白川村における地域防災活動における実態に関する研究～火の番回りと防災水利の維持管理～」日本都市計画学会都市計画報告集 No.8-1 2009年6月
- 2) 浅田麻記子, 落合知帆, 小林正美「岐阜県白川村における地域防災活動の実態に関する調査～消防団と女性防火クラブに着目して～」日本都市計画学会都市計画報告集 No.8-2 2009年9月
- 3) 真野俊和(2001), 「日本の祭りを読み解く」, 株式会社吉川弘文館
- 4) 大口信也 他(2007), 「地域社会における行事の果たす役割とその継承要件に関する研究(住環境の変容プロセス1)」(日本建築学会大会学術講演梗概集 2007 (E-2), p.221-222
- 5) 白川村史編さん委員会, 「新編白川村史下巻」, 1998年3月31日
- 6) 上手重一, 「白川八幡神社のどぶろく祭り」, 2008年10月1日